



遠江・山と里の民俗

会報 第018号

「神澤おくない」

市民応援隊と奉納

神澤おくない継承同好会

石野重利

市民と総ぐるみ

これまで演じてくれた中学生がコロナ禍で来られなくなりましたので「おくない」を継承同好会として奉納することができなくなり困っていました。その状況を知り、伝統行事を繋げていく大切さ知る応援隊が結成され8人が集まりました。市内全域から、笛の担当以外は舞も演奏も全く経験のない40代から80代までの男女が集まり、猛暑の続く8月から練習を始めていただきました。

市民応援隊として中区・東区・北区と幅広い地域から集まり、市民総ぐるみの神澤おくないを継承することが出来ました。

高齢者だからこそその伝統

時間も心もゆとりのある高齢者ならではのおくないの練習は、記録された書籍やDV

Dを見て所作やリズムの取り方を勉強していただきました。高齢ゆえになかなか身につかない所作やリズムをゆっくりと繰り返す中で、本来の姿を捉えるようなってきました。

熊愛館に響く足音

今まで神澤の阿弥陀堂・神社と場所を変えながら奉納されてきましたが、今年から同じ熊地内の「熊愛館」で地域の協力もいただき実施することになりました。熊地区の中心地なので、集まり易く、駐車場も完備しています。

祭りは、ご本尊に対する祈りから始まり、宗教芸能としての立場も忘れることはありませんでした。応援隊の協力によって、これまでに比べて倍近い10演目をホールでのびのびと演じていただきました。

足音を聞きつけて、大勢の参観者が集まり、中世の世界に酔いしれるひと時を過ごしました。終わるころには雪が舞い始め、北遠の中世の雰囲気が高まってきました。

次世代へつなげる、

同好会と応援隊は、みんな次世代につなげていこうと意欲を持っています。子どもたちにも、じっくりと指導する体制を整え、コロナが治まったらいつでも出動する準備は出来ています。



神澤おくない継承同好会と市民応援隊の皆さん

遠江おこないの「翁」

―その魅力と価値

宮嶋隆輔（成城寺小屋講座）

浜松市北区・天竜区の各地で、主に正月に行われる祭り、

「おこない」「ひよんどり」

「田楽」（以下「おこない」）

古式豊かな神事や芸能を現在に伝える祭りとして知られる。

十一月二七日に引佐多目的

の研究センターで行われた

「遠江のひよんどりとおこない

フオーラム」では、寺野ひ

よんどりの「翁」が実演され

た。私からはその解説として、

「翁」の内容、そのすばらし

さについてお話をさせて頂い

た。

●おこないの翁と能狂言の翁

三遠南信各地に伝わるおこないの「翁」は、翁面を着け



寺野ひよんどり翁

た役者が、仏前に向かつて台本を唱え上げるといふ演目だ。

（写真参照）派手な演目ではないからか、一部の研究者を

除いてあまり注目されてこな

かった。しかし、その台本を

読み解いていくと、この「翁」

が実はとても貴重な芸能だとい

うことが分かる。

たとえば能・狂言（能楽）

との関連だ。能の世界にも

「翁」が伝わっており、それ

も能の中で最も重い曲、いわ

ば奥義とされる。「翁」を演

じるためには精進潔斎をして

身を清めなければならぬほ

どだ。

ところが〈能の翁〉は、肝

心の内容（台本）が非常に分

かりにくい。冒頭から「とう

とうたらり、たらりら。たら

りらがりやらりとう」と暗号

めいた文句ではじまり、全体

に脈絡が掴めない。多くの研

究者も「翁」の意味について

は匙を投げてしまう。

一方、〈おこないの翁〉は

どうか。台本によるとその内

容は、正月のめでたい祭りの

場に「翁」という不思議な神・

精霊が現れ、お祝いの芸をし

て去っていくというもの。め

でたい祝福の芸が、味わい深

い言葉をもんだんに織り交ぜ

ながら繰り広げられる。実に

豊かで面白い芸能ではないか。

研究を進めるなかで、〈お

こないの翁〉が〈能の翁〉の

原型となる古い芸能・台詞を

伝えていくことも明らかにな

ってきた。

●正月の祭りと芸能

以下、翁の台本を要約しな

がらざつと紹介していきたい。

まずは、翁が登場する祭りの

雰囲気を見ておこう。寺野ひ

よんどりの序盤の「ユイタテ」

は、「神明用遊、春くれば、

御門に五葉の松林。松や祝う

て立てければ、千歳千代とぞ

栄へたり」という歌にはじま

る。門松を立てて千年も栄え

ることを祝う、晴れやかです

がすがしい正月行事。そうし

た場に、翁役者は「仏法のと

まりとは、このほどを申すか」

（仏法が留まる尊い場所とは

まさにここをいうのだろう）

と、寺野の土地を褒めたたえ

ながら現れる。台本によれば、

この役者は祭りのために遠く

からやってきた旅芸人で、い

わば祭りの特別ゲストだ。役

者は「私が額に当てているこ

の面ですが、実はかのお釈迦

様がお生まれになった天竺の

国からもたらされた、霊験あ

らたかな面なのです。この有

難い翁面を使って、これから

猿楽芸を披露致します」と前

置きを語る。周囲の観客も大

いに期待を膨らませた場面だ

ろう。

●ユーモアあふれる翁語り

ここから役者は「翁」とい

う不思議な神様になりきって、

語りをすすめていく。

「岩の高山に、姫小松が一

本生えています。その姫小松

に枝がさき、龍宮城へさいた

枝の頂きに、金翅鳥（こんじ

ちよう）という鳥が止まり、

「千代や千歳、百代千歳」と、

お祝いの言葉を囀っておりま

す」。はじめに岩山を遠くか

ら眺め、続いてそこに生える

松に注目。松の枝をつたって

枝の先へ、と視点を動かして

いく。語りひとつで、まるで

映像のように流れるイメージ

を作り出し、観客を夢中にさ

せていく。

この翁は、鳥など自然界の

事物と話すことができるとい

う設定になっており、以下鳥

と翁の間答がはじまる。鳥が

翁に対して「僕と君と、どっ

ちが年上か、年比べをしよう

よ」と持ち掛けると、翁は「私

は十七・八歳です」と答える。

お爺さんなのに十代なの!!と

うろたえた鳥は「十代なのに、

どうしてお髭がそんなに白い

んだい？」と問い詰める。す

ると翁は「ある時、海で座禪

をしていたら、高波がやって

来たんだ。その波の白い泡に

髭がすすがれて、こんなに白

くなっちゃった」と答える。祭

りの場はどつと笑いに包まれ

たことだろう。なんともコミ

カルでお茶目な掛け合いは、

現在の漫才や狂言にも似てい

る。

実は、厳格に演じられる〈能

の翁〉にも、こうした面白い

語りの面影は残っている。「松や先、翁や先に生まれけ

ん。いざ姫小松、年くらべせん」と、よく似た内容を謡うバージョンがあるのだ（観世流「法会之式」）。「翁」は本来、松や鳥と年比べをし、大人げなく張り合うさまを演じるような、ユーモアに満ちた芸だった。

ところが室町時代の能役者たちは、将軍家や貴族に気に入られるために、芸をより格調高くする必要があった。そこで「翁」の分かりやすくコミカルな要素を削り、全く逆の、神々しく神秘的な印象の芸能へと、戦略的に作り替えてきたのである。

●翁って何者？

さて「十七・八歳」だと自称する翁だが、別の箇所では真逆のことも語っている。「琵琶湖は三千年に一度、干上がらんじや。それをわしは三回ほど見たことがある」。つまり翁は、九千年以上も生きるとんでもない長寿だという。

九千年も生きる不老不死の翁は、一種の神様らしい。けれども祭りの場にひよっこり

と現れては面白い話を語って聞かせる、フレンドリーな存在でもある。翁は神様ではあっても、立派な本殿の奥深くに祀られる位の高い神ではなく、小さな社に宿る「末社の神」や、道端に祀られる「道祖神」などの、より身近で親しみやすい神（精霊）として造形されている。

●クライマックスの「宝数え」

いよいよ終盤に入ると、翁は「この長生きな翁がやってきたしるしに、世界中の宝物を数え上げて、この村まで運んできましょう」と宣言する。台本によれば、ここで賑やかに鼓が鳴らされ、観客たちも翁を歌い囃して大盛り上がりになったようだ。

翁はお囃子のリズムに乗って、次々と宝物を歌いあげていく。唐土（中国）の宝は、「豹や虎の皮、蜀江の錦、麝香の臍」と、大変珍しい異国の品々だ。続いて「鬼が島」の宝として「隠れ蓑、隠れ笠、打出の小槌」といったファンタジックな宝物も数える。

最後は「日本の宝」で「京の車、大津の舟」といった乗り物「美濃の白絹、伊勢の伊勢絹、尾張の上品」などの布製品「出雲のくつわ、伊豆の大鞍、上総のあぶみ、甲斐の黒駒」という馬や馬具まで、日本各地の名産品の数々だ。

当時の人々にとって憧れの的だった絢爛豪華たる宝物を面白く歌いあげる「宝数え」は、翁芸のクライマックスにふさわしい。

さらに翁は、これらの宝物を遠江まで運ぶ道中のようすを語りだす。まずは博多港で船をチャーターして宝を積み込み、瀬戸内海を通って京へ向かう。「べんざい、べんざい」と船を漕ぐようすも楽しげだ。

京からさらに東へ向かうが、その道中、翁は各地の神社に立ち寄る。京の北野天神、熊野三山、伊勢神宮、尾張の熱田神宮など名だたる名刹を詣で、宝物を奉納していく。ご利益はいかばかりだろうか。そうして遠江に至った船は、浜名湖へ入り、気賀港から都

田川をさかのぼって澁川・寺野へ。宝船の到着に喜んだ村人たちは、みなで協力して宝物を蔵へと運び入れる。「鍵持て来て御蔵の戸開けよ。しつとりしつとりと積んで、まかり帰るよ」。本当に宝物がやってきたかのような、心浮き立つシーンである。

●災害を鎮める仮面のパワー

これにてめでたし、と思いきや。翁は「帰りの船に積むべきものあり」という。「水損・旱魃、苦水・苦風、飢渴・疫病」。悪しき物をば悪魔葛でからめ集めて、舟のど底へとんぶと沈めて、翁は艦辺にうち乗り、もつな切つて放いて、南海補陀落、外ヶ浜へ追ふべし。翁この丸がもどる姿をたれ憎くかろ」。翁は

「悪しきもの」を船に積み込んで沖へ出ていき、船もろとも海に沈めてしまうと語るのである。

めでたい芸なのに、どうして最後に恐ろしい災害について触れるのか。その背景には「翁が災いを持ち去ってくれ

る」（翁芸をすれば、災害が鎮まる）という信仰がある。

日本各地では古くから、翁面などの仮面が強力なパワー（霊験）をもつと信じられてきた。たとえば、ふだんは箱の中に納められている翁面や鬼面を、旱魃に見舞われた時に取り出し、雨乞いの儀式を行ったという土地があちこちにある（遠江では三ヶ日町・宇志八幡宮の鬼面など）。

おこないの祭りでも、面は神様のように厳重に扱われ、毎年「面さい」といって彩色しなおしたり、水で清めるという作法を欠かさない。

「翁」が福を呼び、悪魔を鎮めうるのは、天竺由来の翁面が持つマジカルな力によるものだろう。

「翁」は、幸福に生きることを願った人々の切実な「祈り」と「芸能」が見事に結晶化した〈祈りの芸能〉だ。そこには深い面白みや信仰の世界があり、また歴史的な価値も高い。今後、こうした遠江の芸能のすばらしさがより広く知られることを願っている。

地域伝統芸能大賞受賞

横尾歌舞伎保存会 会長 高井勇

地域伝統芸能大賞

このたび、横尾歌舞伎保存会の床山衣裳部が「地域伝統芸能大賞」支援賞を受賞しました。

「地域伝統芸能大賞」とは、多年にわたり、地域の民衆の生活の中で受け継がれ、当該地域固有の歴史、文化等を色濃く反映した地域伝統芸能等の活用を通じて、観光又は商工業の振興に顕著な貢献が認められる団体や個人を表彰することを目的に制定された賞です。

保存会の床山衣裳部は、四部門ある賞のうち、「衣裳、用具等の製作、人材等の確保に係わる団体又は個人」を表彰する支援賞をいただきました。



びっしりと並ぶ髪の数々

表彰事由は「横尾歌舞伎の髪衣裳の製作と修理」ということ

とで、公演の際には床山・着付として活動するだけでなく、年間を通じて髪と衣裳に関する全ての作業を担当し、戦前から伝えられている年代物の千点を超える衣裳や百点を超える髪の数々から大柄な現代人に合わせた新規の衣裳製作等を行っていることについて評価していただけたものと思います。



整理整頓されている衣裳

全国大会

本来であれば、令和三年十月に開催される予定だった「第二十九回地域伝統芸能全国大会」で表彰式が行われ、高円宮妃殿下

下久子様からメダルと賞状を受け取る予定でしたが、新型コロナウイルス感染症拡大の影響で大会及び式典が中止となってしまいました。コロナ禍以前から後継者不足や地域力の衰退といった地域の伝統芸能を継承することが困難な状況になっていくことを感じていましたので、他部門の受賞団体をはじめ全国の関係者と意見交換する機会がなくなってしまうことは非常に残念でなりません。

ワザ(技)の継承

横尾歌舞伎保存会としてしましても二年続けて定期公演が中止となり、役者や下座音楽だけでなく、床山衣裳部をはじめ、いわゆる裏方として関わっていた

いている会員の活躍の場も失われている状況です。総合芸術である歌舞伎を次代に伝えていくためには、「舞台を支えるチカラ」の継承、つまり床山衣裳部や舞台部など「オモテには見えてこないワザ(技術)」を継承していくことが重要だと考えます。今回の受賞を機に、横尾歌舞伎で用いる髪・衣裳・大小道具・舞台装置等の製作・修理・管理については、連綿と伝えられてきた本市固有の文化財保存



衣裳の手入れは年間を通して

技術であることの認識を一層強くするとともに、その技術の錬磨と担い手の育成に注力していくつもりです。

裏方としての誇り

本年度(令和三年度)出演した唯一の外部公演「静岡県文化プログラム ふじのくに伝統芸能フェスティバル」では、床山衣裳部の堂に入った仕事ぶりで『寿曾我対面 工藤館の場』の一場面を演出しました。全編を通しての上演ではありませんでしたが、舞台上に役者(大磯の虎)が登場することで、絢爛豪華な歌舞伎の魅力を伝えることができたものと確信しています。また、このような上演機会

を維持することが、化粧・着付・舞台装置の製作をはじめとした横尾歌舞伎のワザ(技術)の継承に資するものと強く認識しました。



着付けも手馴れて



髪をつける床山